

生徒指導上の今日的課題とその対応

——不登校事例「A少年が教室に戻るまで」——

岩澤 啓子

はじめに

生徒指導に関する最近の主要課題は『いじめ』と『不登校』である。特に『いじめ』は社会現象化し、学校関係者の枠を越えて地域社会全体の問題となり、その対応が模索されている。私は、社会が成熟の度を高め、漸くこの微妙で捉えがたい“心に関する問題”を組織的に論じることが可能な時代を迎えつつあることを、心から喜んでいる。この社会に『いじめ』が急になくなるとは思われないが、『いじめられる者の心の動きや、いじめる者のありよう』などを見極める間に、改めて現代社会の歪、学校教育の問題点、家庭教育の欠落などについての認識を深め、教育関係者を中心に生徒をいかに育成するかの手立てを展望できるのではないかと期待している。

昭和61年に文部省（当時）が示した『いじめ』の定義は、時代の変化に伴いその内容・解釈が改められている。さらに犯罪性を帯びた行為へとエスカレートしていく『いじめ』に対し、学校・保護者・関係機関が連携して取組むようになると、相談機関に入るいじめの内容に関する相談件数は徐々にではあるが減少傾向を見せており、その対応が功を奏しているように思われる。

しかし、一部においては『不登校』は個人の内面的な問題であるからとか、『いじめ』から派生する現象にすぎないと見なされているなど、課題体質への理解は依然として不十分であ

る。学校現場においては、徐々に増加していく『不登校』に危機感を抱きながらも、校内研修や事例研究等を組織的・継続的に展開している学校は、必ずしも多くないと言われている。

『不登校』は、原因・誘因等が複合的に作用して生み出す特異な生徒の心のあり方にかかわるため、その対応の類型化は難しい。従って、不登校生徒に直接かかわる教師は学習と試行錯誤を重ねて柔軟な発想を養い、ケースバイケースに即応できる指導力を身につけておきたいものである。

1. 不登校生との出会い…初めての体験から学んだもの

私がはじめて不登校生に直接かかわったのは、教師経験15年、漸く教師として一人歩きできるようになり、生徒指導担当教諭を命じられて間もない頃であった。学級担任からの依頼で中3男子生徒の家を家庭訪問し、ようやく目の前に現れた生徒（以下N少年）と言葉を交わそうと笑顔で話しかけたのだが、彼は一向に口を開く気配がなく、私は内心途方にくれていた。しかし、沈黙の継続を避けようと私は言葉を選びながら呼びかけを続けた。

10分程経過した時、それまで頭を垂れて正座をしていたN少年は、突然下を向いたまま「帰れよ」と小さな声ではあったがはっきりとつぶやいた。私は、N少年の態度とその一言からN少年のかかえる悩みの重さを感じるとともに、教師としてこれまで築いてきた自信が大きくゆ

らいだ瞬間であった。

まもなく学校に、教育委員会からN少年のケース担当指導主事が来校した。開口一番「N少年の登校を焦ってはいませんか」と私に問いを投げかけた。その時私は、結果を急ぐ気持ちは抱いていなかったもので直ちに「いいえ」と否定したが、その質問がいつまでも私の心に残った。その後、N少年とかかわる中で“自分が治療に当たっている”とか、“自分の力で完治させるのだ”というような教師の思い上がった気持ちを捨て去ることが、最も大切であることに気付いた。「あなたは焦っていませんか？」というあの問いかけの本質は、“ある種の功名心では成功は望めませんよ”という教訓であったのかもしれない。

4月中旬に不登校となり、翌年1月に学校に戻ったN少年との試行錯誤を重ねた8ヶ月にわたるかかわりは、私にとっては常に『今日の言葉(行動)は、本当にN少年のためのものだったか』と自問しながらの学びの場であった。

その後、何人かの不登校生徒とかかわりを持つことになるのだが、私はこの初期の体験から「教師は謙虚であること」「子どもと同じくらい保護者に寄り添うこと」「関係機関等との連携を密にすること」「校内組織を整備し、事に当たる体制を確立して組織的に取り組むこと」を信条とし、生徒指導に取組んだ。

2. 私が出会った中1 A少年、「教室に入れなかった7ヶ月」の軌道

(1) 事例の概要

中学1年生A少年(以下A男)は、小学校6年生の2月頃から同じクラスの友人B男・C男を含む3～4人から、「言葉によるいじめ」を受けはじめた。そのため数日間欠席をしたが、母親の説得により長期にわたる欠席には至らなかった。母親は、この「いじめ」の状況についてただちに学級担任に連絡すると同時に、善後策について相談をしている。

担任は、攻撃的で目立つB男を「いじめ」の

中心人物とみなし、いじめている現場を見つけては注意・指導を行った結果、一応の解決を見た。しかし、A男の心の中では、その都度先生に注意をうけるB男の直接的な「いじめ」より、B男と行動を共にするが教師の前ではおとなしく振る舞うC男の態度や行動が許せなかったようである。

小学校卒業直前の小・中学校間による情報交換の場においては、A男の「いじめ」による登校不安の事例は話題となったものの、B男とクラスを別にするることによってA男への「いじめ」は解決されるものと見なされていた。

ところが、A男は中学校入学の日にC男と同じクラスになったことを知り、再び母親に登校不安を訴えた。母親は直ちに中学校の担任に相談したが、4月12日には登校を拒否したので、公的相談センターにも電話で相談している。

以下は、A男が母親に話した「いじめ」の概要である。

『C男が通りがかりにそつと言う悪口や嫌な目つき、友人に言わせる(とA男は思い込んでいる)嫌みな言葉などが日頃から気になっていた。今回の登校を拒否した切っ掛けは、4月11日の昼食で友人が弁当のおかずを分けようとA男の弁当箱に入れたことによる不快感・不潔感が高じたことにある。この時の友人は、おかずを好意的に分けてあげたつもりであり、A男に不快感を与えたとは思っていないが、A男はこの行動もC男が友人にやらせた行為であると思い込み、C男への憎悪がつのり以後の登校を拒否した。友だちの行動と、C男は関係がないということを話しても、理解できない状況になっている。』

(2) A男のプロフィール

父、母、姉と本人の4人家族。特に甘やかされて育つということもなく、円満な親子関係を築いている。

母親の話によると、A男は幼い頃から神経質などところがあり、友だちの家に遊びに行っても

その家の中が汚かったと、帰宅後すぐ手足を洗うなどの性癖があった。また、食べ物の好き嫌いが激しいため、小学校の給食も親の申し出で苦手な物は食べさせないという措置をとったという。

また、成績は概ね普通であるが、日常会話のなかで「なぜ? どうして?」を連発する。これは事物に対する興味や関心とは別に、幼児性の「なぜ: なに現象」の名残と思われ、全般的に依頼心が強く対人関係がきわめて不器用で、自分の満足した答えが得られない時には、逃避的な態度が強く現れる。

(3) 指導過程

①指導体制の確立

問題行動の発生と同時に、保護者や小学校の担任から情報を得て、A男への段階的(3ヶ月)アプローチ(表1)を計画し、保護者・教職員の共通理解を図るとともに、随時協力・支援を得ることとなった。

かかわる中で無理が生じたら、すぐ「対応レベル1」から「対応レベル2」に移行するという、指導の時期と具体的な手だてに見通しを明らかにすることは、不安にかられている保護者に安心感を与え、また、抱え込みがちな教員体

質の回避を図る役目を課すことに期待した。

②初期段階における親の動きと教師の対応

発生から、A男の相談担当教師(コーディネーター役)として私が面接を始める日までの約2週間について、親と学校側の動きをまとめたものである。「生徒指導は、組織で動く」ということを重視した校内体制を敷いた。

表2「初期段階における親の動きと学校の対応等」

③本人への課題及びそれによる行動の変容(4月20日～10月31日)

平成15年文部科学省は、不登校児童生徒が「主体的に社会的自立や学校復帰に向けて歩み出せるよう、周囲の者が状況をよく見極めて、そのための環境づくりの支援をするなどの働きかけをする必要がある」として、個々の子どもの状況に応じた適切な働きかけを学校が行なうよう求めた。

表3「A男の7ヶ月の軌道」は、A男の心身の状況を判断しながら保護者や関係機関、時にはA男と話し合う中で本人の努力目標(本人の課題)を週毎に設定し、それを明確に示すことによって保護者や教師が支援していくという

表1 「段階的アプローチ」

月	【対応レベル1】	【対応レベル2】	【対応レベル3】
4	登校刺激を与える a 友人の呼びかけ	保健室又は相談室登校をうながす a 教師との接触 b 友だちとの接触	自宅学習 a 担任の家庭訪問 b 課題学習
5	登校刺激を与えない a 本人及び親との定期面接 b 担任の他に、学年からコーディネーター役の担当者を決める	登校刺激を与えない a 親のみの定期面接 ----- 専門機関へ依頼する a 通級学級へ	専門機関へ依頼する a 通級学級へ b 転校も視野に入れた話し合い
6	専門機関へ依頼する a 通級学級へ		

表2 「初期段階における親の動きと学校の対応等」

回	月・火	親（母親）の動き	学校（教師）の対応等
1	4/7	学級担任に相談	担任は学年の会で情報提供
2	4/12 15	公的相談センターに電話で相談	相談センター相談員から相談内容の連絡（保護者承諾済）受 A男対応についての段階的アプローチ案を作成し、教職員の共通理解を図る 相談センター相談員との継続的連絡を開始
3	4/14	担任及び校長・学年主任と学校にて面談	子どもの動き、親の心理状況の把握に努力 学年からコーディネーター役の担当者（A男の相談担当教師）を選定
4	4/18	担当教師と電話で相談	母親との面接日を約束
5	4/19	親子で児童相談所を訪問し相談	児童相談所の担当員と情報交換（保護者承諾）
6	4/20	担当教師との面接が始まる	内容は以下（表3）のとおり

表3 「A男の7ヶ月の軌道」

週	本人への課題	行動の特徴	留意点
1週 母 親 面 接 4/20 か ら	(◎ 母親を通して本人へ連絡する) ア 戸外へ出よう（活動範囲の拡張） イ 体を動かそう（運動） ウ 家の手伝いをしよう (コミュニケーション) → 評価と自信 エ 学習をしよう（自由に） ☆ 母親への課題 ア 週1回の定期面接に来校する イ 生命第一の考えで本人と接触する ウ おおらかな態度で接する	○「このままずっと学校へ行けなくなるのか？」 「自分の将来はどうなるのか？」という不安を母に訴える。 ○「自分なんかいない方がよい」と、精神的動揺をあらわす。 ○友人の登校誘いを拒否するが、友人のことを気にもしている。	○本人への課題は押し付けではなく、様子を見ながら気分のよい時に話すよう強調する。 ○本人が、友人に会うことや教室入室を拒否しているなら、他の場所（保健室・相談室等）の登校も可能また、登校時間も本人の希望でよいことを話し、学校の受け入れ姿勢を示す。 ○母からの相談・連絡等の受け入れ体制を確立し、連携を密にする中で母の変容を図る。

2週 母 の み 4/25	☆ 母親への課題 ア 無理に友人に会わせない イ 親子の会話の中に学校の話題入れ反応をチェックする	○誰の電話にも出なくなる ○友人に会いたくないと言い出す。	○友達にA男の状態を話し、訪ねて行かないよう協力頼む。 ○親子ともに学習の遅れが気になりだしているの、ノートコピーを約束して安心感を持たせる。
3週 母 の み 5/2	(◎ 母親を通して本人へ連絡する) ア 連休に入るので、思いきり遊ぶ	○母の面談について行きたいと話す。	○連休を迎え、心と体をリラックスさせるよう母親にアドバイスをする。
4週 母 子 来 談 5/9	ア 自分を見つめよう イ いろいろな先生方と話をしよう	○登校時間ではないから、学生服を着て行くのはいやだと言う→私服でもよいと伝えと、Gパンで登校する。 ○廊下の壁に身を寄せ、隠れるように会議室に入り、約20分の面談で帰宅する。 (20分の面談の中で、少しではあるが自分の気持ちを話す。 …初日) ○翌日は来られるか不安だと言いながらも、来なければと思いは始める。	○本人の気持ちを大切に、受け入れる姿勢を示す。 ○無理強いはいしないで、登校時間や下校時間をA男本人に決めさせる。 ○先生方は短時間の面談で、勉強以外の話題で接する。
5週 本 人 の み 5/16	ア 学校にいる時間を少しずつ増やそう イ 学校を知ろう(保健室・校長室などを毎日巡回する) ウ 自習プリントをやってみよう	○PTAの役員が会議室に入ってくると顔をこわばらせていたが、週末には慣れて緊張状態は少なくなる。 ○少しずつ在校時間が増え週末には4校時までいることができた。	○会議室にPTA関係者が入って来て仕事をして、部屋を替える配慮などしないで、本人の様子を見る。 ○友人の話題を持ちかける。
6週	ア 学校で弁当を食べよう	○弁当を持ってきて、話をしな	○時々保健室で学習をさせて、

以下本人の み 5/23	イ 自分で学習計画を立てよう ウ 下校する時には、校長・副校長先生に挨拶をして帰ろう ◎同学年D男との接触を試みる	がら食べる。 ○職員室・校長室へ一人で入ることができる。 ○中間テストを保健室で受ける。 ○嫌がりながらもD男と会うが、2～3言葉をかわすとホッとした様子を見せる。	他学年の生徒との接触を試みる。 ○同学年では、他学級のD男に協力を求め、休み時間に偶然而装いを装いD男に会わせることに成功する。(友人の話題の中で、特にD男には興味を示したので、D男を選んだ。)
7週 5/30	ア 学級の時間割に合わせて、教科書を持ってこよう イ 教科の先生から出される課題を自習しよう	○カバンが重たいと言いながらも、時間割をそろえてくる。	○教科の先生は、授業の前に課題を与えていく。 ○授業のない先生が話し相手になりながら、自習監督に当たる。 ○友人の思い出を書いたり、教室の様子を図に書いたりして、意識づけをする。
8週 6/6	ア (自然教室は不参加なので、その間は) 日記をつけよう	○日記を書く。 ○特殊学級の教室に入り、小作品を作る。	○特殊学級へ遊びに行くことをすすめる。
9週 6/13	ア 授業の課題を職員室の先生まで聞きに行こう ☆級友との接触を試みる	○職員室に出入りする。 ○級友の出現に戸惑うが、嫌がらない。	○D男が本人の級友E男を連れて、A男のいる会議室に会いに行くかたちをとり、成功する。
10週 6/20	☆接触する友人の数を増やす	○6月25日、1年生の自然教室のスナック写真を会議室前の廊下に掲示すると「みんなが写真を見に来るか、相談室(2階)へ行きたい。ダメな、学校へは来ない。」と訴える。「相談室へ行くこと以外は考えられないのか」と投げかけ	○「相談室に行かせてくれなければ、学校に来ない」と、交換条件を出す気持ちは、甘えとわがままであることを気づかせる。 ○写真の掲示担当の先生が5日間(従来は10日間)で写真を撤去することを本人に話、安

		る、ふて腐れた態度で帰宅した、翌朝「みんなが写真を見に来る前に登校することにした」と言って、早く登校する。	心感を与える。
11週 6/27	☆接触する友人の数を、さらに増やす	○期末試験を保健室で受ける。	
12週 7/4	ア 級友と弁当を食べよう（会議室にて）	○級友2人を交、楽しく食事をする。 ○10週で起きた写真の一件以、遅刻がなくなる。	○学級に戻る準備段階に入る。
13週 7/11	ア 口癖になっている「なぜ?」「どうして?」をやめよう	○級友が強引に教室に連れて行こうとしたこと、月曜（11日）は登校を拒否する。→ゆっくり休ん、今の気持ちをノートに書いておくように話す。 ○翌日（12日）、欠席した気持ちをノートに整理して持ってくる。	○誘いに行った級友、A男の心の動きを話、強引な力ずくでの誘いではな、他の方法を考えて欲しいと協力をあおぐ。
14週 7/18	☆夏休みの課題 ア 家の手伝いをしよう イ 「なぜ?なに?」をなくそう ウ プールに10回以上は行こう エ 日記を5日以上は書こう	○夏休みを迎える楽しさから、家族旅行の計画や自分のやりたいことなど、いつになく多弁に話す。	○依頼心の現れでもある「なぜ・なに現象」に焦点を当、本人が意識的になくしていくよう努力していかなければいけないこと、理解させる。 ○運動はあまり好んでやる方ではない、水泳は嫌いではないの、課題に取入れる。
夏休み（※ 約束した課題に挑戦し、健康に過ごす）			

月	本人への課題	行動の特徴	留意点
9	行事に参加しよう	<p>○朝会や学年集会, 昇降口まで出るようになる。</p> <p>○体育の時間は体操着に着替, 裏庭でランニングをする。</p> <p>○昼休みには友人と裏庭でバレーボールをする。</p> <p>○体育祭では体操着に着替, 本部内のテントで見学する。</p> <p>○クラブ活動に参加する。</p> <p>○芸術鑑賞会には学級に入, 同一行動をとって関内ホールまで出かける。</p>	<p>○会議室から少しずつ出ること</p> <p>を課題にすると同時, A男にかかわる友人の数を増やす</p> <p>○9月中旬に「約束を守らなければいけない」というプレッシャーから登校しぶりを起こす,</p> <p>その時はA男の気持ちを受け入れ「ゆっくり休んで自分を見つめよう」と言葉をかけると翌朝は登校, 休んだ時の自分の気持ちを話すようになった。</p> <p>(欠席9月1, 10月1回)</p>
10	少しずつ学級に戻ろう	<p>○音楽の授業, 音楽室のドアまで来, 廊下で授業を受ける。</p> <p>○大掃除, 学級の分担区域を級友とともに掃除する。</p> <p>○合唱祭, クラスに入り出演する。</p>	<p>○11月学級復帰をねばり強く話し合, A男の気持ちをその気にさせていく。</p> <p>○学級復帰に努力する行為, 最大限評価してやる。</p> <p>○学級の生徒, A男を受け入れる心構えを話, 学級の受け入れ体制づくりを始める。</p>
11	学級に戻ろう	<p>○1, D男の協力を得, 教室に入る。</p>	<p>○遠くから見守る形をとる。</p>
11月1日 A男学級に復帰する			

「働きかけ」を重視した取り組み事例である。

3. A男の日記を通して見た「心の変容」

面接指導の中でしばしば日記（作文）を書かせたが、5月6月は与えられた課題（例えば、1日の出来事など）を、ほんの2～3行書く程度であった。しかし、7月になると文も少し長くなり、自分の気持ちを表した次のような文章が認められた。

日記①『学校に行かなければと思うけれど、朝になると行きたくない』

日記②『学校へ行くと、力づくでクラスに連れて行かれるかと思うと恐ろしい。考えると頭が痛い。絶対クラスなんか、行くものか。』

など、心の動揺を示すものと並行して

日記③『…こんな僕は、クラスに行けるようになるのかなー。』

という前向きな不安を訴えている。

また、その頃に報道された中学2年生の家族殺害事件のニュースには

日記④『親が子どもの気持ちを分かってやらないから、親も悪い。

僕は、殺したい気持ちはあっても、殺す勇気がない。』

と、複雑な反応を示している。

9月になると、教室にはまだ入れないが登校することへの自信が出てきたので、不登校の原因となったC男に対し、次のような感情をぶつけている。

日記⑤『今日C男に廊下であつたので、にらみつけてやった。にくらしい。

許せない。殺してやりたい』

11月に教室に戻ったあとの日記では、

日記⑥『クラスに戻れた。

あの頃はクラスが嫌でたまらなかったが、今考えると一人で会議室や保健室にいるのは、教室にいるより嫌だ。

クラスに戻れて本当に良かった。』

と、心からの喜びを素直に表し、快く迎えてく

れた同級生に感謝し、C男に対する個人的な憎しみや恨みの気持ちは、うすらいでしまったようである。

4. A男の教室復帰（解決）から

…事例のまとめとその考察

A男が、初期段階で児童相談所の検査を受けた結果は「たいへん幼く依存性が強い。また、社会性が乏しく現在のクラス構成を替えても、新しいグループに強い子がいれば再度いじめの対象になる可能性は十分にある。上手に対応できる社会性を身につけさせたい。学校は、本人に少しずつ自信を持たせるよう指導してほしい。」という内容のものであった。

いじめが原因の不登校ではあるが、いじめを周りのおとなが取り除いてやるだけでは、何の解決にもならない。中学校では、クラス編成によりA男に対するいじめを軽減するとともに、本人の部分的に残存する幼稚性や依存性の改善を図っていくことを目的とした指導計画を実施することが、必要であった。

4月から10月までの7ヶ月という期間に、本人の変容をはかるべく様々な試みがなされたが、それらは必ずしも順調に成果を収めたのではなく、紆余曲折を重ねる日々であり、A男との面談が終わった後には「これでよいのだろうか」と考えてしまう日も少なくなかった。

幸いにして教職員の協力体制が充実しており、直接接触する指導者側の心の安定を保つことができたことは、A男や保護者に安心できる環境や居場所を与えることにつながり、A男の復帰という良い結果をもたらした重要な要因の一つであったと思われる。

11月に教室に戻れた後のA男は、人が変わったように依頼心が減少している。また、復帰後の日記にも見られるように、物の見方や考え方の成長が著しく、行動面も落ち着きが見られるようになった。

この間、A男の指導に当たって特に心掛けたことは、次の通りである。

(1) 外部機関との連携

- ①いじめによる不登校発見のきっかけとなった相談員との情報交換を行い、親の『いじめに対する捉え方』と、生徒の『いじめられて登校したくない(登校できない)気持ち』を把握する。
- ②定期面接(月1回)を行っている児童相談所のケースワーカーとの情報連携を密にし、学校での指導の手掛かりを得る。

(2) 本人へのかかわり

- ①親や教師が力づくで学校に来させても、本人の意志で学校に来なければ無意味であることを、親や本人に気づかせ、いつでも待っているという学校の受け入れ姿勢を伝える。
- ②本人の気持ちを受容しながら本人に問題を返し、本人に自ら考えさせるような態度で接する。
- ③一歩前進した時や、本人が努力をしていることは、最大限に評価してやる。
- ④多くの教師が、それぞれのキャラクターで接触を図っていく。
- ⑤本人の要望や訴えは「助けを求める叫び」か、「甘えからくるわがまま」かを的確に判断して、後者は是正を図るよう指導する。

(3) 親とのかかわり

- ①学校側の窓口を一本化して、いつでも気軽に相談に応じられるような体制をとる。
- ②親の気持ちをリラックスさせ、不安を少なくさせることで、親の変容をうながす。

(4) 本人をとりまく友達とのかかわり

- ①いじめの該当者へ…いじめがもたらす精神的圧迫を、相手の気持ちになって考えられるように指導・カウンセリングを行う。
- ②一般生徒へ…いじめをしない・いじめを許さない雰囲気づくりを定着させる。
- ③クラスおよび友人へ…学級では、不登校生徒に対する理解と受け入れ体制をつくり、本人

が気を許して話せる友人には、協力を求めると同時に本人と学級を結ぶパイプ役を依頼する。

(5) 教師の共通理解と協力

- ①情報の提供…指導中の不登校生の気持ちや心の変化、友人とのかかわりの現状や、他機関からの情報を交換することにより、共通理解を持つ。
- ②それぞれのパーソナリティーによる接触…不登校生の気持ちを受け入れる姿勢を示すとともに、力による指導や無理な刺激は与えないことを基盤に、それぞれのパーソナリティーで接触し、温かい触れ合いの中から不登校生の気持ちの変容を図る。

5. 不登校生の対応から見えてきたもの …指導者側の課題

(1) 発見の遅れ

学校を休みはじめの頃は、頭痛・腹痛・発熱などの身体的な症状や、不安・おびえなどの心理的な反応を示すことが多い。かつて文部省は、不登校の直接のきっかけは「特に原因が見あたらない」が一番多く、これに続いて「いじめなど友人関係の問題」「学業不振」「親子関係をめぐる問題」の順になっていると発表した。このことから、原因を探ることは大切であるが、執拗に探っていくうちに対応が後手後手となり、本人をより長く苦しめる結果になっていることが多い。

(2) 保護者の動揺

母親の言葉に、「なぜうちの子だけがこのような状態になったのか?」「朝、ゴミを出しに行く時間を、登校時間からずらしました。中学生の制服姿を見るのがつらいのです。」との訴えがあった。保護者の動揺は、そのまま子どもに伝わり、子どもの気持ちを追いつめていく。

保護者も、なぜわが子が学校に行けなくなったのかは分からないのに、不用意な教師の質問が保護者を精神的に追いつめてしまうことがあ

る。「どのような保護者でも、子どもの不登校状態に動揺しない者はいない」と考えられ、保護者の動揺をそのまま先ずは受け止めて保護者に寄り添い、その言葉に謙虚に耳を傾ける姿勢こそが教師には求められている。その結果、保護者の心にゆとりが生じ、さらに教師への信頼感が高まるというステップは、子どもの問題の解決につながる重要な要素でもある。

(3) 教師の相互理解と共働の欠如

担任だから、生徒指導担当教諭だから、養護教諭だからという役割で問題を抱え込むことは、子どもの気持ちより大人（教師）の立場を優先させることであり、厳に戒めなければならない。それぞれの立場の固執が、一人の子どもの立ち直り（解決）を遅らせる要因にもなりかねない。問題解決が長引けば、「甘やかしているのではないか」とか、「寄り添う姿が見られない」などとの教員相互の非難や不信感が先行し、組織的な生徒指導が困難となる。

担当教師（コーディネーター役）を軸に、担任等それぞれの持つ資料を総括した情報等と、他の関係機関の有する情報等を関係者が共有し、組織の課題として捉え、学校一体となって問題解決に取組む校内体制づくりが、極めて重要である。

(4) 復帰に向けた学級の受け入れ態勢の不備

不登校生が教室に戻る時に踏み出す第一歩は、想像を絶する心の葛藤がなされているものと思われる。タイミングよく背中を押すことは効果的であるが、その役割は必ずしも教師に限らず、クラスメートの方が適役である場合も少なくない。

問題は、受け入れる学級の態勢づくりである。中学生の中にはまだまだ幼い考え方の者もあり、よく聞かれる言葉は、「今まで休んでいたのに、ずるい」「特別扱いを受けて、ひいきされている」など当事者の傷つく言葉を平気で口にする。また、口には出さないが態度で表現す

る子も出る。これでは、緊張感が頂点に達している不登校生の過敏な神経は、またも悪化の一途をたどるおそれもある。学級や部活動等の受け入れ態勢づくりは、多くの教師がエネルギーを注いで築かなければならない大仕事である。

(5) 外部機関との意志疎通の欠如

生徒も、内に見せる顔と外に見せる顔があるように、教師がとらえている生徒と外部機関が捉えている生徒が異なる場合がある。内外の意思疎通を欠くと、それぞれが「今こそ登校刺激を!」「いや、今は静観していた方が…」と異なった認識が強くなり、当然相手への信頼度が低下し、結果として生徒への対応にマイナスとなって跳ね返る。双方の認識が異なっていることの原因が判明すれば、それはそれで子どもがそれぞれの場において求めているものが異なっていることを見い出せることになる。連携とは、信頼関係を持って行なうことであり、好意的な雰囲気の中で分かり合うまで話し合い、共同歩調で歩むことである。

6. まとめ

平成4年、文部省が出した「不登校はどの子にも起こり得るもの」「登校への促しは、状況を悪化させてしまうこともある」との報告は、学校現場において「登校刺激を与えてはいけない」「難しい対応を要求されるのなら、専門機関に任せた方がよい」などの誤解が生れ、多くの教師を不登校生から遠ざけてしまった感がある。

しかし、子どもや保護者にとって、専門機関やカウンセラーへの信頼感とは別に、教師にも格別な期待感を抱いている。教師は、本人・保護者とのかわり以外に、学級の様子や学習の進捗状況、行事等を把握し、教職員への協力体制や受け入れ級（クラス）への指導、不登校の要因となる問題の除去や改善等に直接携わる立場にある。特に、子どもが学校（学級）に復帰当初の気配り及びその後の環境づくりについ

て、保護者が教師に期待するものは大きい。

学校は、担任以外にも教科指導や部活動顧問として当該生徒にかかわっている教師は多い。担任だから、顧問だからという枠を外し、その子どもに一番近い存在の教師がかかわることで、子どもとともに保護者も安心感を増していく。かかわる役割の教師は、コーディネーター役を認識しながら、彼らが期待する教師像を目指してその役割を果たしていくことが極めて大切なことだと感じている。

平成19年7月に、学校基本調査の不登校児童・生徒の人数が広報された。新聞の見出しは、『中学不登校8052人最多』『小学校2070人、10年前の2倍』の文字が躍っていた。この数字は、18年度に神奈川県内の児童・生徒が年間30日以上傷病等以外で学校を休んだ人数である。中学校では、3.62%が不登校を起こしており、40人学級で1人から2人が不登校という深刻な事態が報告された。

かつて平成15年に、これまでの単に見守るだけの対応や、立ち直りを待つ傍観者の対応を見直すよう、文部科学省の「不登校問題に関する調査研究協力者会議」から提言書が出されたことがあった。さらに、中学生に進級した際起こす「中1ギャップ（環境が大きく変化するために不登校になるケース）」は、ここ数年増加傾向にある。

これらを考えると、一人ひとりの不登校生のための校内教職員の協力・支援体制づくりとともに、当該学校間及び関係諸機関との連携、ネットワークによる情報共有は、効果的な対応・意味ある働きかけをするのにますます重要になってくる。今回の中学不登校過去最多の報道は、これまで効果的に取組んできた各学校の対応を検証し、その努力と成果を見直しながら、教師の指導力向上を図る契機としたい。